

## 都島工業専門学校の大学昇格運動

（資料室まえがき）以下の安達成光氏、植木正富氏の文章は、大阪市立大学土木会の『土木会報』第11号（1988年）に掲載されたものである。都島工業専門学校の大学昇格運動に関する臨場感溢れる報告であり、貴重な資料となるので、ここに再録させていただいた。一部は、抄録としたこともお断りしておく。

### 昇格か、廃校か！

安 達 成 光  
（土木科・昭和24年3月卒業）

#### はじめに

これからお話することは、昭和20（1945）年8月15日、日本が無条件降伏をして2年半余りを経た頃のことである。

大阪市内の中心部は、まだほとんどが茶褐色の焼け跡のままで、ところどころに防空壕を利用したトタン屋根の小屋やバラックの小屋が点在していた。大阪城の東側、陸軍の工廠跡も、今でこそ美しい緑の公園になっているが、当時はアメリカ軍の爆撃跡も物凄く、鉄骨が鉛の如く曲がりくねり、赤錆びた鉄のジャングルの様相を呈していた。

繁華街やターミナルには、復員兵が充ちあふれ、闇市が繁盛し、小学校の低学年や幼稚園児の年頃の子供たちが、靴磨きをしたり闇タバコ（当時タバコは配給制）の立ち売りをしたりしていた。街はウス汚い茶褐色と灰色で溢れていた。そのなかを進駐軍のアメリカ兵だけが陽気に颯爽と闊歩していた。とりわけ派手な恰好をした女性と腕を組みつつ……。

これが昨日まで命をかけて守ろうとした、

平和で豊かであるべき我が祖国と、そして我が大和撫子達の一部の姿であった。食なく衣なく住なく、日本全体がその貧しさから如何にして立ち上がろうかと、もがいていた時代である。それから40年余。現在の日本は当時から想像もできぬほど、あまりにも自由で平和で豊かである。

『降る雪や 明治は遠くなりにつけり』。昭和6年、草田男の句である。

昭和20年前後は、私たちの10代後半にあたる。そのころ明治37、8年の日露戦争と言えば、草田男の感慨には全く関係なく、遠い遠い昔の物語だと感じたものである。現在の高校生や大学生が昭和20年前後の戦争時代・敗戦直後の時代、既に43年の彼方を顧みると、時間的には全く同距離である。しかし今の若者たちにとっては、世情の差、教育の差により、むしろ明治より尚ズッと遠い、想像の外の時代であるかもしれない。

#### 昇格か廃校か

学制改革の噂がクラスの話題になりだしたのは、何時頃からだったろうか。

「中学課程の3年間は義務教育になり、したがって中学校が新制度の高等学校に、専門学校・高等学校は新制の大学になるか廃校に

なるかどちらかのようだ」。

休憩時間、机の上に腰を掛け、敗戦キセル（兵器の廃品材料で作った真ちゅう製のパイプ、当時流行）で一本のタバコを順番に回しのみしつつ、クラス仲間の専らの話題となった。

昭和21年4月に入学した我々4期生は陸海軍からの復員者が多く、ほとんどの者が粗末な軍服を着ていた。我が土木科で詰め襟の学生服を着ていたのは3、4人、国民服（中国の人民服の様なもの）を着ていたのが1人か2人、他の者は皆、陸軍か海軍の服を着ていた。3年生や2年生の詰め襟の集団をみると、全員が良家の子弟に見えて懐かしくもあり可愛く（失礼！）感じたものである。私自身も復員のときに着て帰ったボロの軍服で3年間を通した。少しはましな軍服も持って帰ったが日ならずして闇市場の物々交換で食糧に化けてしまった。

「大学昇格か？ 廃校か？ 歴史のない我校は廃校の線が強いようだ」

ヒソヒソと、深刻そうな噂を聞きながら、私はなんとなくさめきっていた。「廃校なら廃校でいいじゃないか。どこかへ転校するか、働くか、その時に考えたらいいんだよ」と周囲の友人たちに公言しつつ、心の中では「面倒くさい、廃校なら廃校と早く決まってしまう」と思っていた。

終戦直後の混乱の中での人生の再出発。将来どうしようとも思い付かぬまま、ただ4月の入学期がきたのでフラフラとはいった」地元大阪の学校であり、友人（土木3期卒U君、旧制天王寺中学時代の親友、現三井物産常務）の「おまえは軍人以外では土木屋しか向かないぞ」の一言で、なんとなく選んだ土木であっ

た。今にして思えば、世情の混乱期以上に私の思想の混乱期であった。

そんなある日、突然建築の上級生S氏（学生委員会の委員長であったのか？）が我々の教室を訪れ、「このクラスには廃校賛成を唱えているものが居るようだが、君たちは社会へ出て母校のないことがどれほど淋しいことかわかっているのか」との意味のことを涙を浮かべんばかりに語りかけた。熱弁であった。誠意があった……。この様に我校を愛する人がいるのに廃校もやむなしと日頃公言し、手をこまねいていたことが非常に申し訳のないことにおもえた。そして索漠たる世相のなかで一つのことに情熱を捧げている姿をみて、美しくも且つ羨ましくも思えた。無気力であった私の心の底にも何らかの影響をおよぼしたようだ。

その日から私の学生生活であったのかも知れない。ラグビーもはじめた。応援団にも籍をおいた。学生委員会にもでた。

## 学生大会

昭和23年正月、昇格・廃校問題もいよいよ大詰めとなり、市当局の最終判断にまかせたまま幕切れを待つ処まで追い込まれた。関係者はそれぞれ懸命の努力をされている。学生側としてもここで最後の決定打を放たなければ、今までの努力が水泡に帰し、千載に悔いを残すことになる。

当時、私は大学昇格期成同盟の副委員長をやっていた。数人の各科委員が額を寄せあって無い知恵をしぼりあった。殆どが復員学生である。期せずしての結論が血判であった。学生全員の血判により、大学昇格を関係当局

に強く訴えようということである。如何にして全員の賛成を得るか。当然、血判を時代錯誤だと反発する勢力も予想されるし、且ての私のような無関心の学生も可成りいることであろう。委員相寄り綿密に打合せをした。各人の役割も決めた。

数日後、学生大会を召集した。講堂は略々満席。2、3の教授の顔もみうけられた。

大会の進行についてはあまり覚えていない。記憶にあるのは、とにかく土木4期のM君（故人、元市大職員）が「自由」について熱弁を振るっていた。「……諸君は自由について全く理解していない。君達は今前を向いて行儀良く椅子に座っている。それが既に駄目なんだ。アメリカの学生大会などでは、横を向いたり後を見たり、人と話をしたり……」。そこで「何時アメリカで見てきた!」との野次が飛んで大爆笑をした。続いて話の中にデカルトがでてカントがでた。サルトルもでてきた。マルクス・レーニンもでてきた。腰に手を当て、机を叩いての熱弁であった。彼は戦後やっと得た『自由』の尊さを懸命に論じたかったのであろう。

最後に私の番がきた。喋った詳細は既に40年の彼方に忘れ去った。「商と工とは車の両輪、大阪には既に市立の商大がある。敗戦により焦土と化した日本の復興の先駆けとして、大阪が往年の東洋一の商工都市としての面目を取り戻すためには、市立の工業大学をもつことこそ緊急不可欠の課題である…」との意味のことを喋った。更に現在の情勢の非常に厳しいこと、何としてでも我々の力で大学昇格を果たそう、との意味のことを訴えた。そして最後に己にたいする叱咤も込めて、「……諸君が且て我が祖国に捧げた情熱

を、且て諸君が中学時代、その母校に捧げた情熱を今こそ我等が母校都島工専に捧げるべきである!」と結んで壇上より降りた。

「そうだ。そのとおりだ」。歓声と拍手のなかを、I君（故人・電気4期。応援団長。私にとっては旧制中学の3年先輩、士官学校の先輩でもある復員学生、元岡鉄工業社長）が、すかさず登壇。「大学昇格問題に対する我々の不退転の決意を血判をもって関係当局へ訴えよう!」と高らかに緊急提案。間髪を入れず、壇上で学生大会の書記をしていたK君（機械4期。俳優。応援団リーダー長として両手に日の丸の扇子をもって乱舞する彼の三三七拍子は他校にまで有名であった）が、そのペンを投げうって、「賛成! 賛成!」と壇の中央へ躍りでた。つづいて数人が駆け上がる。「そうだ。血判だ。やろう! 賛成だ。」……わあわあとの歓声……。大勢は決した!! 各委員の奮闘により学生大会は成功裡に終わった。

## 血判

早速、学校の玄関に署名用の巻紙を並べた。指を切るための安全カミソリの刃を数枚と消毒用のアルコールと脱脂綿を用意した。先ず最初の署名血判は、応援団長のI君にお願いした。続いて昇格運動の中心になっていた委員連中に済ませてもらい、さて数番目、私も署名をすませ血判のため左手親指の腹をカミソリで軽くサッと切った。……血がでてこない。そんな筈はないのだが……。切りかたが浅すぎたのか……。些か慌てた。再度グッと切りなおした。今度は血が出過ぎて止まらない。これもまた恰好悪い。早々と血判をすませ、血のとまらぬ指を人目よりかくした。血

判をおす時は、浅く切って血をしぼりだすのが通常である。そのときはすっかり忘れていた。

陳情書は3部作ることになっていた。文部省と大阪市長と市会議長あての3部である。一週間ほどで略々全員の署名血判を得ることができた。その間、卒業後学校職員として残っていた土木1期のN氏（旧都土六木会々長）や先輩たち、卒業設計専念のため、既にほとんど登校していなかった3期生も所用で学校に顔をだしたとき、あるいは人づての噂をきいてわざわざ登校して署名に参加してくれた。ある日、3期生の某君が登校してきて署名をしてくれた。鮮やかな血判である。彼は明朗なスポーツマンであった。心の美しい者は血まで綺麗なんだな。数人でささやいていた。ところがである、いつまでたっても血の色が変わらない。……赤チンだったのである。彼は平身低頭、我々の厳しく見守るなかで血判を押しなおした。今から思えば、愉快なハプニングであった。

一方、これらと別に土建電機の各科で夫々分担して街頭で一般市民の署名を集めた。梅田、難波、天六、上六の各ターミナルで闇商人や靴研きの間に割り込んでの運動である。あるグループは、地まわりに「ショバ代」を払えと迫られた。一見復員者風、ボロ服の一団である。地回りにとっては闇商人にみえたとしても当然であったろう。笑えぬ実話である。

このあたりの話しは、昇格運動は勿論、ラグビーに、応援団に、人生第一歩の就職（小さな建設会社を希望）まで共にしたU君（土木4期・旧制中学の2年先輩・復員学生）が詳細を報告する由、割愛する。

## 陳情書提出

これらの署名簿をそえて血判陳情書を市当局へ提出した（市大百年史によれば昭和23年2月13日となっている。ただし同日学生大会を開催して血判陳情書を作成したような表現になっているが、これは何らかの誤りである）。父兄会の理事長と私ども3～4人で中之島の市役所を訪れた。3階の大きな市長室には、初めて見るような厳めしい大きな机が据えられてあった。土佐堀川に面した窓際の応接セットで貫禄ある近藤大阪市長は「ウン、ウン」とうなずいて陳情書を受理してくれた。あまり記憶は残っていないが、何とはなしに頼もしい印象を受けたものだ。

次に市会議長室へ。田村議長は顔面蒼白のうちに、「此のような多数の血判書を見たのは初めてだ。慄然とする。御期待に副うよう万全の努力を約束する。」との意味のことを力強く答えて下さった。議長の緊張された面もちと、慄然と言う表現を使われたのを、はっきりと覚えている。続いて、市の職員に庁舎の東南角にあった市政記者クラブへ案内された。各社の記者が大勢で私たちを取り囲んだ。400人を超える血判書をみるのは初めてだと、巻紙の陳情書を机の上に伸ばして、パチパチとカメラにおさめた。当然翌朝の新聞に写真入りでデカデカと報道されるものと期待したが、何もでていなかった。血判書という時代錯誤の代物を掲載するには、戦後あまりにも近すぎて、各社のデスクの判断によりボツになったのであろうか。

これらの行動とは別に、3人程度が一組となり、市会議員の自宅へ個別陳情をした。我々学生には気づかないことであり、学校幹部や

父兄会幹部の御指導であったのだろう。今から思えば、大学昇格運動にとって最も大きなポイントの一つであった。当時の市会の文教委員の先生方であったのだろうか。

この方たちのお蔭で、のちに『大阪市立工業大学創設に関する意見書』が議員提出の形式で市会で審議されることとなる。意見書の内容は、「大阪は我国生産の中枢である。…世界的大産業都市の建設を目指して復興諸計画を進めている以上、…基盤となる工業教育の充実拡大を図ること…都島工専を中心に、これらの関係機関（市立工業研究所その他の意）を総合し…特色ある市立工業大学を創設し、以て大阪市の復興を促進する原動力となる一機関たらしめたい。よって理事者は、この際各般の事情を洞察せられ、大阪市立工業大学創設に関して、その目的を達するため大いに努力せられるよう望む。…大阪市長宛。大阪市会議長田村敬太郎。」となっている。（アンダーライン部は原文通り、今回調査）

### 満場一致

その後、4月に旧制度の工専の最後の卒業生になるはずの新入生（6期生）を迎え、一ヶ月余を経た。

昭和23年の5月頃のある日（今回市会議事録を調べたところ、5月28日）、いよいよ大詰の市会が開催されるとのことで、傍聴にいった。1期生のN先輩と私と3、4人であったと記憶する。初めていかめしい大阪市議会の議場にはいった。記録によると、当日の議案は、『電気ガス税に関する市条例一部改正の件』、『大阪市上水道使用料に関する臨時措

置条例制定の件』、そして3番目が『議員提出議案第8号、大阪市立工業大学創設に関する意見書提出の件』となっている。正面の一段と高い壇上の、とてつもなくデカイ議長席に、田村議長がでんと座り、議事が進められてゆく。当時、議員定数は何人であったのだろうか。傍聴席から見わたすかぎり、殆どの議員がゆったりと夫々の席についているのに、一人だけ背すじを伸ばし両手を前の机の上に突張らせて、今にも立ち上がらんばかりに全身に緊張をみなぎらせた議員がいる。田村議長が、議案を提案する度に、その議員は間髪を入れず声をはり上げ、「議長！議長！」或いは「反対！反対！」とその右手を頭上に高くさし上げる。議事は彼を全く無視した様に多数決で進められてゆく。やがて、彼はやっと議長の指名を得て、壇上へ上がって反対演説をする機会を得た。どよめきと批判の声が飛ぶ中で「戦後の、この市民生活の苦しいときに生活に直結した公共料金を上げることに絶対反対である」との主旨の堂々たる主張であった。聞いていて私は成程そのとおりだと心の底でうなずいた。つづいて与党であろう、賛成演説がなされた。「市民生活を真剣に考えれば、将来の安定供給のためにも、此の際値上げもやむをえない。真の生活困窮者には別途の方法で善処すべきである。各事業の現状をふまえ、将来をふまえ、大局的立場に立って判断すべきである」との内容のこれまた堂々の演説であった。またまた私は全くその通りだと心の底でうなずいた。

この案件は起立により採決が採られたが、反対は先の彼一人であった。議長の提案の度に、結果的には無視されつつ、周囲の批判のぞわめきをものともせず、「議長！議長！」

「反対！」と大声で叫びつつ腰を浮かさんばかりに、机の上にのばした右手をサッと頭上高くさしあげる。この内容は判断致しかねるものの、素晴らしい情熱であり勇気であると思つづく感心した。

……と、議長が何か次の案件を提案した。一瞬議場が静寂をとりもどした。彼も両手を机の上に突っ張ったまま動こうとしない。「異議なし」（記録によれば）の声も私の耳にはいらなかった。それほど今までと異なった空気が一瞬議場を支配した。「それでは左様（原案通り）決定致します」。議長の声が単々と響いた。そしてまた先程までと同じパターンにもどり、次の議事がすすめられていった。

この一瞬の静寂こそ『大阪市立工業大学創設に関する意見書』の市会通過の一瞬であった。『大学昇格』決定の待ちに待った瞬間であった[あくまでも「意見書」の採択である（資料室注記）。あっけない程の一瞬の出来事ではあったが実に嬉しかった。当日ただ一つの満場一致も嬉しかった。感動した。

市会の本会議は終わった。傍聴席より議場を出ると、すでに廊下には何人かの議員先生方が私達を迎えてくれて、祝ってくださった。先程まで、すべての議案に反対の立場で孤軍奮闘していた彼も近づいてきて『おめでとう。よかったですね。』と、ねぎらいの言葉をかけてくれた。彼は痩身で、あのようなファイトがどこに秘められているのかと思われるきゃしゃな感じの人物であった。

後日談であるが、はからずも私は大阪市に奉職することとなり、昭和28、29年に現場の工区主任として担任した地域が彼〔I氏〕の選出区であったので、何かとお付き合いをし

て頂いたが、若い私に対してさえ腰の低い謙虚な紳士であった。当時は社会党の市長時代であったが、最左翼の党の市会議員は彼一人であった。主義のため必死の孤軍奮闘の日々であったのであろう。

とにかく、このようにして念願の大学昇格運動は実を結んだ。その後の記憶は定かでない。市会を通過した工業大学設置案は、その後発展的に総合大学案に変更となり、理工学部が設置されることとなった。当時の私どもとしては、正直なところ総合大学とまでは知恵がまわらなかった。ただひたすら市立の商大にたいして市立工業大学をと懸命の努力をした。さすが当局である。市会の提案をもとに、より発展的な総合大学案に変更したのである。我々にとっては、なお嬉しいことであった。

その後、理工学部長として小竹無二雄氏の招へいが決まっていたのち、今から思えば僭越この上ない話だが小竹先生に面会を申し込み、3、4人で教授陣や工学各科の内容の充実に関して注文をつけにいった。青二才風情が、生みの苦勞もしらずに無責任な口出しをして、生意気な申し訳ないことではあった。この件は、私達4期生の卒業式も終わってからのことであつたと思う。

## おわりに

本文は私一人の記憶に基いて述べたものである。遠い昔のことであり、年月や内容に若干の思い違いや忘れ去って書き漏らしたこともあるかもしれない。調査をすれば、もっと正確を期しうることも多々あるだろうが時間に追われて殆どを記憶のみに頼ることとなっ

た。従って私中心になったことをおわびすると共に、より正確を期するため、お気づきの点があればご一報賜われれば幸甚である。

尚以上述べたことは、言うまでもなく我々学生側の運動状況である。私どもの知らないところで、またズッと以前より、平野校長先生始め学校当局の先生方・父兄会の理事長並びに役員の方々・また土木のN先輩や諸先輩達が夫々の立場で若い我々の到底気づかない、より高度な次元で努力をして頂いた。それらの努力の結晶が稔ったのだということを忘れてはならない。遠い昔を思い出して関係者の皆様に、心よりお礼申し上げる。

『大阪市立大学工学部に栄えあれ』

昭和 63 年 8 月 15 日 欄筆

(あだち しげみつ)

(資料室付記) 安達氏は 2011 年 3 月 2 日の研究会には元気な姿をみせておられたが、その後体調を崩され、7 月 28 日に他界された。本回想記の再掲を喜んでくださっていたが、刊行を見ていただくことはできなかった。謹んでご冥福をお祈りするものである。